代表小島 海を渡りアメリカへ

アメリカ合衆国ポートランド介護事情②

～米国に優れたケアプログラムがあった！～

昨年秋のポートランド（アメリカ合衆国）研修報告の続きです。

医療保険は個人加入の民間保険が中心の米国ですが、公費医療制度（メディケア＝高齢者対象、メディケイド＝低所得層対象）を使った高齢者の医療と介護の切れ目ないケアプログラムがあります。PACE（A Program of All-inclusive Care for Elderly）と呼ばれるもので、今回このプログラムを行うProvidence Elder Place を訪問しました。「年をとっても心身に不自由があっても、可能な限り住み慣れた家で暮らし、人生を終えるのがよい」と、まるでえんの理念のような理念を掲げ、施設や長期療養型医療機関が適当と認定された高齢者が対象。基本的に医師・看護師・管理栄養士・理学療法士・作業療法士・介護士・ソーシャルワーカー等から構成されたチームにより提供されますが、見学先では言語聴覚士や、薬剤師、精神科医、牧師も配置されていました。複数の診療科・リハビリが揃いワンストップで必要な医療やケアが受けられ、移動支援や自宅へのヘルパーも必要に応じて柔軟に提供されています。自宅で家族介護者がいる場合は、介護離職を防ぐため、デイケアの参加日を増やしているそうです。ここでは提供できない症状の場合は責任を持って必要な医療につなぎ、一般の人より長く生きられることが数字で示され、医療コストを抑える効果も上げています。意志の確認が困難な人の９割に法的な代理人がついているのが日本との大きな違いでしょう。また、さまざまなプログラムが用意されていても本人が望まなければ強制されないのも魅力です。見学先には牧師が配置されることからわかるように、『死生観』にも踏み込み、86%の参加者が自宅（医療機関以外の施設含む）で亡くなっています。費用は一人当たり平均月額3,000～4,000ドルですが、対象者の99%が低所得者であり、ほとんどが公費から支払われています。対象者が限定され、提供先は少ないのですが、このような制度があることに驚きました。もっと知られて良い、日本でも参考にしたい制度です。

また、日本のグループホームのような小規模ホーム（フォスターホーム）があり、その介護職員は多くが中南米からの移民だと知りました。移民に厳しいトランプ政権の政策が、もともと家族が殺害されるような過酷な状況の中、命がけで逃げてきてこの職についた人々を追い詰めているといいます。残念ながら今回はそうしたホームは見られませんでしたが、同じ介護の現場にいる人々が、安心して仕事に携われるような国であってほしいと心から願っています。

小島美里

※アメリカ合衆国ポートランド介護事情①は、えん通信№59に掲載しています。